アサザプロジェクト出前授業の地域環境学習事例集

小中学校の総合学習や環境学習では、子どもたちが自分たちの地域についてよく知ることで、地域の可能性に気づき、それを活かしたまちづくりを提案し、社会に働きかける取り組みに発展させていくことが重要です。そのような学習は、子ども達が地域の担い手として大きく成長することができる貴重な場となります。

アサザプロジェクトの出前授業では、子どもたちの持てる知識を総動員して、自分の考えを提案し、実現に向けた行動ができる人材になるための学習プログラムを全国各地で実施しています。このような実践を通して、子どもたちが主役となって、地域に眠っている資源や価値を掘り起こし、地域社会を巻き込んで新たなまちづくりを実現した事例がいくつも生まれてきました。ここで紹介する事例のように、みなさんの地域でも子ども達と共に地域が持つ可能性を掘り起こし、未来の地域づくりに取り組んでみませんか。

学習プログラムの流れ

① 気づく

はじめに生きもの（他者）の視点に立つ方法を学びます。他者の視点に立って身の周りを見直すことで、これまで見えていなかったつながり（文脈）や課題が見えてきます。

② 探求する

「ここにはどんな意味やつながりがあるのだろう？」、「昔あったつながりが、なぜ今はなくなってしまったのか？」といった問いを自ら立て、関心、思考を深めていきます。

③ 提案する

身の周りの「つながり」は地域の文化や自然に根ざした固有のものです。そのつながりを価値に変えていく方法をインターネットや書籍だけではなく自ら考え、それぞれ考えたことを発表し、話し合い、共感し合い、より良い提案を考えます。

④ 働きかける

みんなで創りあげた提案を実現させるために、地域や社会に働きかけをします。このような体験によって、子ども達に勇気や自信を持たせることと同時に、コミュニケーション能力や表現力、知識などの不足などといった自分自身の課題に気付かせることで、生きる力に根ざした学習意欲を引き出します。

アサザプロジェクト　日本各地での出前授業
全国に広がる環境学習の取り組み

これまでに全国で３００校以上の小中学校で、環境学習を行ってきました。年間延べ１万名を超える児童生徒が学習に参加しています。

継続的な取り組みを行っている事例の中から、今回は３つの地域の事例をご紹介します。

秋田県八郎潟流域

地元伝承の民話を活かし、広大な八郎潟とその流域を一体のものとして捉え、再生の方法を考える学習
・8～11ページ掲載

長野県天龍村

希少な渡り鳥がなぜ村を選んで毎年来るのか？　その理由を探ることで地元の特色を活かした村づくりを考え提案します

福岡県北九州市

都市と干潟や川、里山を結ぶことで、地域の特色を活かした環境先進都市の実現を目指すまちづくりを提案します
・12～15ページ掲載

宮城県南三陸町

山と川と海のつながりによって生まれてくる海産物であるワカメやカキのブランド化を通した復興への取り組み

茨城県霞ヶ浦流域

170以上の小中学校で行われてきた学習による日本で二番目に大きい湖、霞ヶ浦の再生活動

東京都内

生きものと相談しながら創る自然と共存する未来都市を提案する学習

京都府京都市

歴史ある都市で、人々の記憶や記録を活かした自然と共存する未来都市の提案

三重県宮川上流

獣害や耕作放棄地の増加といった問題を資源化する取り組みお茶のブランド化事業など
・3～7ページ掲載

沖縄県宜野湾市

信仰の対象となってきた泉群（カー）や地下水脈が生み出した地元の特産物（タイモ）のブランド化

沖縄県宮古島市

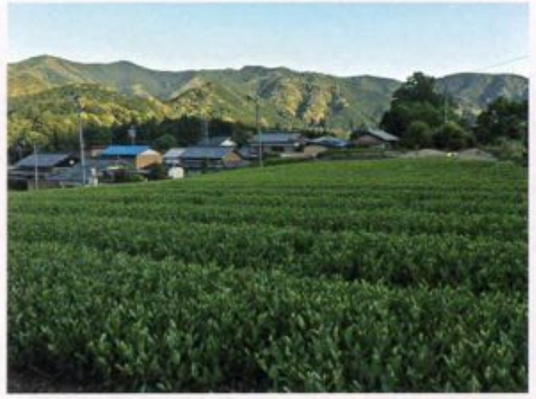
島で唯一の水源である地下水の保全のために、地域の特色を活かした方法で考え、提案する学習

学習展開事例１－１

地域に魔法をかけ、町全体をお宝に変える取り組み
～　三重県度合郡大紀町　～

秘境大台ケ原に源を発する清流宮川の流域は、豊かな自然に恵まれている一方で、急激な過疎化や高齢化に加え、獣害や土砂災害などの問題を抱えています。かつては、林業が盛んに行われ、今でも伊勢茶や松坂牛の産地として知られています。また、宮川源流部にある大台ケ原周辺は、最後まで日本狼が生息していた地域としても知られています。滝原宮があるなど伊勢神宮ゆかりの地として、日本の古くからの伝統や文化が残されている地域でもあります。

ここでは、子ども達と地域の特色を見直し、それらを活かした自然と共存する町づくりの提案を行っています。ここでの学習のポイントは、自然環境の保全と地域活性化の一体化です。そして、自然や文化といった地域の特色を活かしながら事業を興し、問題を資源化することで地域を元気にできる担い手の育成を目指しています。



1　生きものの目を通じて地域にある自然を見つめ直し、つながりに気づく

三重県度会郡大紀町の小学校では、地域のお宝探しの学習を行っています。「地域の自慢できるものは何？どんなお宝がある？」という問いかけから学習は始まりました。はじめに、子ども達が「宝物」として選んだものは、松阪牛や名所旧跡などの以前から有名なものばかりでした。しかも、それらは特定の場所にあるもので、地域や町全体にはありません。そこで、子ども達に新たな問いかけをしました。「町のどこにでもあるもので、宝物に変えられそうなものを見つけてみよう。みんながまだ宝物だと気付いていないものを見つけよう。」　ここから子ども達によるお宝探しが始まりました。

新たに始まったお宝探しは、地域を支える様々なつながりを探りながら進めていきました。地域を支えるつながりを理解するためには、地元に生息する生き物を手がかりにします。子ども達は、「生きものとお話しする方法」を学習しながら、それぞれの生き物が生息する上で必要とする自然の中のつながりがどの様なものかを調べます。この学習をとおして、つながりの大切さを学び、地域に眠る様々なつながりを掘り起こしていきます。

「生きものとお話しする方法」では、生き物の体のつくり、すみか、くらしがそれぞれどの様に関連しているかを学びます。他者の目になって見方を変え、見慣れたものを見直してみることで、多くの発見や気づきを得ることができます。生き物の目になって地域を見直すことで、子ども達は今まで気付かなかった地域の特色に関心を持つようになります。次に子ども達は生き物になったつもりで、地域の探検に出かけます。森の木を見ても、形や大きさなど様々な違いがあり、川を見ても、いろいろな大きさや形の石があったり、水の流れや温度などの違いがあることに気づきます。また、それらの違いを活かして多様な生き物が暮らしていることを知ります。地域の特色は、地域に眠る多様性やつながりを掘り起こすことで見えてきます。

町の中を探検した子ども達は、今まで当たり前と思っていたものの中にも様々な意味が眠っていることや、それぞれの生き物が多様なものをそれぞれの方法で結び付けて暮らしていることに気づきました。そして子ども達は、昔の人々も地元に眠る多様なものを結び付け暮らしや文化を創り上げてきたに違いないと考えるようになりました。そこで、子ども達はお年寄りから、地域の昔の暮らしや自然についての聞き取りを行いました。

2　当たり前にあるものをお宝に変える方法を考える

子ども達は学習を進めていくうちに、町に当たり前にあるものにも、多くの意味や価値が眠っているのではないかと考えるようになりました。見方を変えることで、当たり前にあるものから様々な意味や価値を掘り起こすことができるようになれば、それらをお宝に変えることができます。当たり前に何処にでもあるものが宝物にできれば、自分たちの町をまるごとお宝に変えられ、町全体を元気にできる!ということに気づきました。

町のどこにでもあって宝物に変えられそうなものは何か。子ども達は、宝探しに何度も出かけました。そして、何度も話し合いを重ねました。

2-1　問題を資源化して荒れていた茶畑を再生!

そうして子ども達が見つけた宝物は「お茶畑」でした。宮川流域は伊勢茶の産地として有名ですが、最近では農家の高齢化に伴い手入れがされずに放棄された茶畑が町の至る所で見られます。放棄された茶畑は、藪になって獣の住処や通り道になり、獣害を拡大させ深刻化させています。獣害については、子ども達も以前から関心を持っていました。

獣害と放棄された茶畑の関係（つながり）に気づいた子ども達は、お茶を「宝物」に変えようと考え、地域の大人達に茶畑の再生と無農薬栽培したお茶のブランド化を提案しました。子ども達は地域の大人達や企業の人たちの協力を得て、耕作放棄されたお茶畑を再生させ、お茶づくりを実現しました。このようなプロセスを経て生まれたお茶の価値や意味、そしてお茶に込められた自分達の思いを伝えるために、お茶のネーミングやパッケージデザインについて何度も話し合いを重ねました。皆が共感でつながり、多数決をせずに決めた名前、それが『七保のお宝　あたたかきずな茶』です。このお茶は毎年生産され、地元を中心に販売されています。

2-2　豊かな森からの湧水【ふるさとのおくりもの】

お茶づくりに取り組んだ学年の次に新たなお宝探しに取り組んだ後輩たちは、町の大半を覆う森から湧き出る清らかな水を選びました。地元の人達から「木屋の水」と呼ばれ親しまれている湧き水が、なぜ美味しい水なのかを調べました。そして、この湧水も森や土や生き物、雨、石灰岩などのつながりによって生まれて来たことを知りました。石灰岩は大昔の貝やサンゴ礁が固まってできたものなので、大昔の海の記憶が眠っています。水にもつながりを教えてくれる壮大な物語があることに、子ども達は気づきました。

子ども達は、地域の人達につながりの大切さを伝えるために、木屋の水をボトリングして、水の物語（パンフレット）と一緒に配りました。

2-3　木と生きものからのメッセージ

このお宝探しの学習は、毎年後輩たちに引き継がれています。子ども達が、町のどこにでもあるものを宝物に変える学習を続けています。次に、お宝に選ばれたのは「木と生きもの」。町の大半を占めている森をもっと活かした町づくりはできないか、多くの生き物とうまく一緒に生きていく方法を考えて獣害問題を解決できないかというメッセージを込めた木工品を作り、地域の人達に配る取り組みをしました。

3　地域の問題を資源に変えて未来のまちづくりを考える

これらの学習では、過疎化や獣害などの地域が抱える課題や問題をどのようにしたら解決できるのか、単に対策や方法を考えるのではなく、地域全体に眠るつながりや意味や価値の発掘を行い、地域の問題や課題を広い視野で捉え直し、地域の特色を最大限に活かした新たな価値を創造することで、問題を解決に導くことができる未来に向けたポジティブな力を持つ子ども達を育てることを目的に、地域の多様な主体が協働して取り組んでいます。

＊このような学習を支える多様な主体による協働＊

地域住民主体の地域活性化に長年取り組んできた「野原村元気づくり協議会」では、地元の活性化に子ども達も参加してもらいたいと以前から願っていました。アサザ基金の出前授業をきっかけに地元の小学校と協議会の連携が始まり、大紀町や三重県の支援によって続けられています。

また、キヤノンマーケティングジャパン株式会社が「未来につなぐふるさとプロジェクト」の一環として、参加、支援を行っています。

○　学習の継続、卒業した後も続けていきたいという子ども達が塾をつくる

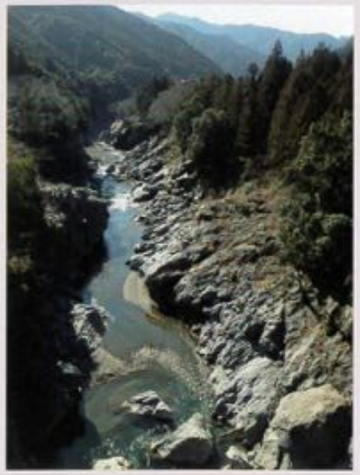
小学校で地域のお宝探し学習を経験した生徒達が、卒業後もこれまでの学習を継続していきたいと塾を立ち上げ自主的に集まって活動を始めました。お茶の生産量を増やして荒れた茶畑の再生を進めることや、新商品の開発など、自然やつながりを活かした町づくりに取り組み、未来の地域の担い手となることを目指して活動しています。

○　山村から全国に向けて発信する!

自分達の学習をとおして生まれた地域のブランド品や取り組みの内容について地域外に出て発表することは、子ども達が地元の特色をさらに理解し、次の展開に必要な課題を考える上で役立ちます。この小学校や未来塾の生徒は、茨城県牛久市のまちづくり学習発表会に何度も参加し発表を行ってきました。また、三重県内のイベントや東京都内にある三重県のアンテナショップ等で取り組みの紹介をしてお茶などの販路拡大にも取り組んでいます。このように地域の枠を超えて社会への働きかけを行うことで、子ども達の学習意欲をより強く引き出すことができました。

他の地域の人々に、自分たちの活動を紹介し、様々な意見やアドバイスを得ることで、子ども達の視野を広げると同時に、自分達の活動に自信と地域への誇りを持たせることができました。

学習展開事例１―２
オオカミと考える獣害対策で町を元気にする取り組み
～三重県多気郡大台町～



宮川の最上流部に位置する三重県多気郡大台町は、壮大な大台ケ原の山懐に抱かれた自然恵かな地域です。ここでも先に紹介した大紀町と同様に過疎化や獣害、森林荒廃、土砂崩れなどの問題が深刻化しています。この地域にある小学校の子ども達も、生き物とお話しをする方法を学び、地域のお宝探しの学習を行い、問題の資源化がテーマになりました。

学習する中で、とくに印象的だったのは、子ども達から何度も発せられた「害獣が増えたのは、日本オオカミがいなくなったからだ。」という言葉でした。宮川の上流域は絶滅した日本オオカミが最後まで生き残っていた地域といわれています。そのため、地域には、今でも日本オオカミへの思いや記憶が生きていることが、子ども達との対話を通して見えてきました。そこで、地域の深刻な課題である獣害の対策を、オオカミと相談しながら考える学習を行うことにしました。オオカミとお話しする方法を学び、オオカミの目になって獣害問題を見つめ直すことで、従来の獣害対策とは異なる発想が生まれてくると考えたからです。

1　自然観の変化から獣害問題を捉え直し、解決の糸口を探る

まず、日本オオカミの体のつくり、すみか、くらしを学び、オオカミの目で地域を見直してみることから始めました。また、日本オオカミがなぜ絶滅したのかを考えることで、自然と人間の関係の変化について学びました。

昔の人たちは、オオカミのことを山の神として尊敬しオオカミから様々なことを学んでいました。しかし、日本が近代化を歩む中で、自然と人間との関係も変化し、日本人のオオカミ観や自然観も大きく変わっていきました。オオカミを退治する『赤ずきんちゃん』のような、人間に都合の悪い生き物を悪者にして退治する童話が西洋から入り人々に浸透していきました。子ども達は、人々の自然観の変化や自然と人間との関係の変化が、日本オオカミの絶滅の背景にあることに気づきました。そして、獣害発生の背景にも、同じような自然観や人と自然との関係性の変化があることに気づきました。

問題の真の解決には、何かを悪いと決め付けやっつけて無くすことではなく、悪くなってしまった相手との関係をいかにして良くすることができるのか、その方法を考えることが重要です。そのような発想の転換や新しい見方を身に付けることが必要であることを、子ども達に気付かせます。その上で、獣害対策について見直してみました。このような学習を、人々の記憶の中に生きている日本オオカミとの対話を通して進めていきました。

学習をとおして新しい発想の獣害対策を提案することができれば、地域から全国に発信していくことができるのではないか。子ども達と、日本オオカミに教えてもらう獣害対策づくりの学習を行っていきました。

2　オオカミと対話しながら獣害対策を考える

まず、従来の獣害対策について調べました。これまでの獣害対策では、電気柵や爆音機などの単純な刺激の繰り返しで害獣を防ぐというものが主でしたが、獣の生活文脈の中で意味のある刺激でなければ、単純な刺激の繰り返しに獣はすぐに慣れてしまいます。害獣をただ追い払えばいいという発想には限界があります。同時に、なぜ野生動物が害獣になってしまったのか、その原因を考えなければなりません。自然林が人工林に変えられたり雑木林が荒れて自然の餌が減ったり、耕作放棄地が増えて藪化した所を害獣が利用したりすることが背景にあることを学びました。

そして、自然と人間の関係が、どのように変化していったのかを考えました。

子ども達とは、一番初めに学習した生きものとお話しする方法を思い出しながら、具体的な獣害対策を考えました。害獣の体のつくりやすみか、暮らしを調べて、それぞれの生態を学習しました。さらに、オオカミについて調べたこととも合わせて、それぞれの害獣が生活文脈の中で「こわい」、「にがて」と思えるような対策を考えていきました。

3　自然との関係やつながりを取り戻し、活かす提案へ

子ども達はオオカミとの対話を通して、様々なユニークな獣害対策を考え出しました。
「オオカミの声やにおい、目の光などを、オオカミの存在を意味するようにつなげて再現したらどうか?」
「オオカミが獲物を襲う時の物音を再現したらどうか?」
「オオカミの代わりになるように訓練した犬を貸し出す仕組みをつくったらどうか?」
オオカミとお話ししながら考えた提案が次々と出てきました。
たくさんの提案発表がされている中で、一人の男の子が言った、
「鹿も猿も人も、みんなが一緒に生きられることが一番いいんじゃないかな」
という言葉に周りの子ども達も反応し共感の輪が広がりました。

害獣が悪いんじゃない、悪くなっているのは人間と獣たちとの関係なのだから、これから関係をどうやって良くしていけばいいかを考えていくことが、未来の町づくりにつながることに皆が気付きました。

これらの学習を行ってきた子ども達は、問題を単に悪いものを減らしたり無くしたりすれば解決できるものとしてではなく、地域全体を視野に入れた大きなつながりの中で考えることで、悪くなってしまった関係をどのようにしたら改善できるかという視点を得ることができました。子ども達が環境問題に取り組む中で、このような能動的かつ価値創造的な姿勢を体得していくことが地域活性化と一体化した環境保全を進めていく上で重要となります。

学習展開事例２

地域に伝わる物語を学習に活かす取り組み

～　秋田県八郎湖流域　～

秋田県八郎湖周辺での学習を紹介します。八郎湖（八郎潟）は男鹿半島の付け根に位置し、昭和32年から行われた干拓事業が実施されるまでは、日本で2番目に大きな湖でした。かつては漁獲量が豊富で、湖の周囲では佃煮加工も盛んに行われてきました。しかし、干拓や護岸工事、水門の設置などによって環境が悪化し問題となっています。

また、流域では、人口減少による過疎化や耕作放棄地の増加、森林の荒廃などの問題も生じています。環境保全と共に地域の活性化や担い手育成が喫緊の課題となっています。

八郎湖流域では、未来に向けて地域の自然や文化を継承する担い手育成が特に重要なテーマとなります。ここでは、地域に伝わる物語（民話）の力を活かした環境学習を紹介します。

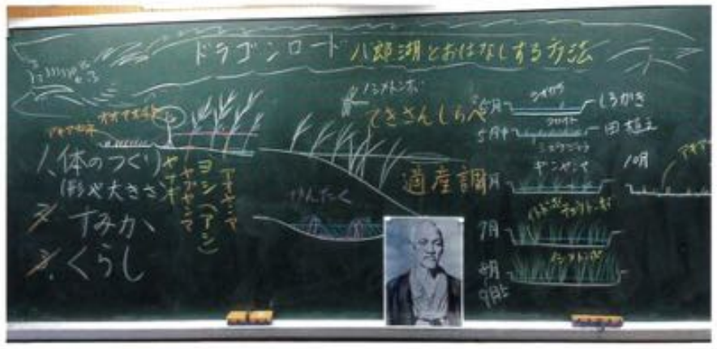
～物語の力で湖と流域全体を捉える～　人々や湖をめぐる大きなつながりを象徴する竜

八郎湖の環境問題は、湖のみならず流域全体の多様な問題が複雑に絡み合って生じています。このような実態を理解するためには、まず湖と流域を一体のものとして捉えることが必要です。しかし、そのような目を持って地域を見直すことは、大人でも容易ではありません。そこで、子ども達には物語を通して湖と流域を結び付け、未来へのビジョンを考える学習に取り組んでもらいました。

広大な湖と流域を一体のものとして捉え、問題の解決や未来へのビジョンを考える学習を行うには、初めに、地域を支える大きなつながりに気付くことが必要です。湖や人々をめぐるつながりは複雑で全体を理解し説明することは不可能ですが、イメージや象徴を通して感じ取り伝えることなら可能です。

子どもたちが物語をとおしてイメージを共有することができれば、地域に眠る様々なつながりや価値、意味を発掘し、それらを自分の文脈で結び付けていくことができるようになります。この学習で参考になるのが、地域に伝わる民話や物語です。

秋田県八郎湖流域では、地元に古くから伝わる民話「八郎太郎物語」を活かして、八郎湖の未来を考える学習を行っています。子ども達は、この物語に登場する主人公の竜（八郎太郎）との対話を通して、湖と流域を結ぶ大きなつながりをイメージとして共有します。



お帰り八郎太郎物語～共感を力にして新しい物語をつくる学習

この学習は、八郎湖の昔と今の違いを知ることから始まります。「八郎太郎物語」は自然が豊かで水も清らかであった昔の八郎湖を舞台に生まれました。

まず、八郎太郎物語を竜が住んでいた頃の話として位置付け、環境が悪化する前の八郎湖や流域の環境や人々の暮らしについて学びます。そして、環境が悪化して多くの生き物たちが姿を消してしまった今の湖を、竜がいなくなった湖と位置付けます。さらに、どのようにしたら竜が湖に帰って来るかを考えながら、湖の環境改善について話し合います。竜は、ここでは自然が豊かだった頃の八郎湖の象徴であり、湖と流域を結ぶつながり全体を表すイメージです。

昔の八郎湖の環境を取り戻し、竜を呼び戻すには、どうすればいいのでしょうか。まず、湖や流域に住んでいる生き物たちからヒントを得ます。生き物たちの生息を支える環境のつながりを学び、次にお年寄りから昔の人達の暮らしや自然について聞き取りをします。昔の暮らしから、自然と人とのつながりの大切さを学びます。それらの学習を通して、子ども達は自然や人のつながりを取り戻すことが、湖の再生に結び付くことに気付きます。そこから、竜を呼び戻すために皆で地域につながりを作る新しい物語「お帰り八郎太郎物語」へと展開していきます。

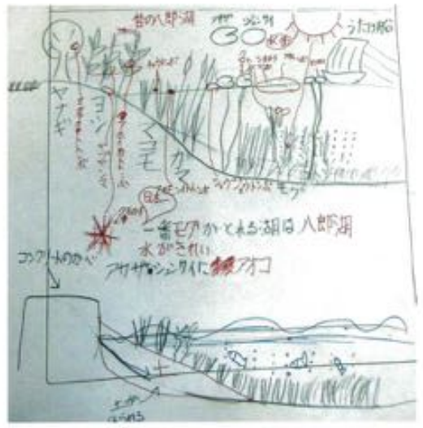
このような流れの中で、湖の再生や地域の活性化といった現実的で難しいテーマにも、子ども達は物語を作る学習を通して、イメージを共有しファンタジーを感じながら取り組んでいくことができます。そして、その過程で、子ども達の中には様々な意見や考えを取り入れ共感する力も育まれていきます。

答えが用意されていない環境問題を解決に導く上では、この共感力が不可欠です。多様な意見を反映させ総合化していくためには、皆の共感力を引き出すことが必要だからです。

1　竜はなぜ湖から姿を消したのか～湖や社会の変化を調べる

八郎湖は、海の近くにある浅瀬の多い湖でした。そのため、生物生産性が高く、昔は魚が湧く湖と言われるほどでした。この頃は、八郎太郎の伝説が人々の中で生きていました。しかしその後、干拓事業に伴う護岸工事で浅瀬が失われたり、防潮水門が設置され海との交流を妨げられたりするなど、湖の環境が大きく変化しました。さらに、生活排水等によって水質が悪化したことで湖内に豊富に生育していたモク（沈水植物群落）が消滅し、魚類も激減しました。湖の環境悪化と共に、八郎湖に対する周辺の人々の関心も薄れていき、人々の心の中に棲んでいた竜（湖へのファンタジー）も忘れられていきました。

このように湖の環境や社会の変化を竜のイメージと結び付けて考えることで、地域を支える大きなつながりの象徴としての竜を呼び戻すという目標を、子ども達が問題解決に向けて共有することができます。ここでは、竜を呼び戻すという目標が自然や社会等の様々な要素を含むことになります。



2　失われたつながりを取り戻すことで竜を呼び戻す物語を考える

民話として伝わる八郎太郎物語では、主人公の竜が山や川、湖など多様な環境を舞台に登場します。この物語そのものが、湖と流域とのつながりを教えています。学習では、昔と今の山や川、湖の変化について、つながりをキーワードに見直していきます。そして、つながりが失われたことで竜だけではなく多くの生き物が姿を消していったことを知ります。

子ども達は山川湖のつながりを知ることで、地域の特色をより理解できるようになります。また、子ども達は地域を支えるつながりを意識して考えることで、今起きている問題の本質や解決の可能性を探る手掛かりを得ることができます。地域にあったつながりが失われた結果様々な問題が起きていることや、問題の解決には地域につながりを取り戻していくことが有効であることを、子ども達は自然に理解していきます。失われたつながりを取り戻し、新たなつながりを創造する物語を考える学習へと展開していきます。

3　山、川、湖、海のつながりを通して、八郎湖の再生を考える

失われたつながりとはどのようなものだったのか、どのようにしたらつながりを取り戻していくことができるのか。そのために、昔の八郎湖の様子や人々の暮らしを地元のお年寄りから聞き取る学習を行い、人々の暮らしと湖がどのようにつながっていたかを学びました。また、校庭のビオトープや川や池、田んぼ、そして湖や水源地などへ行って観察を行い、それらの場所と場所を結ぶ生き物の道（つながり）があることを知りました。

環境が悪化する前の八郎湖には山や川などから多くの生き物たちの道がつながっていたと考え、それらの自然の中のつながり（生きものの道）を、子ども達はドラゴンロード（竜の道）と名付けました。ドラゴンロードを取り戻すことが、竜を呼び戻すこと（八郎湖の再生）につながると子ども達は考え始めました。

4　つながりを取り戻し、湖を再生する実験

この小学校にはコンクリートで造られた観察池がありましたが、子ども達は池の水が年中濁っていたり生き物が少ないことが気になっていました。まず、身近な環境から良くしていこうという提案があり、池の改造（ビオトープ化）を考える学習が始まりました。改造計画を考える時に、昔と今の八郎湖をくらべる学習を行い、池をコンクリート護岸化され水質が悪化した現在の八郎湖「ミニ八郎湖」に見立てました。

このミニ八郎湖に昔の八郎湖にあったつながり（ドラゴンロード）を再現すれば、濁っていた水がきれいになり、生き物も集って来るのではないかという仮説を立てて改造を行っていきました。池の中と陸との間を生き物が移動できるようにコンクリート岸に土砂を入れて段差を無くしたり、浅瀬を造ったり、昔湖に生えていた水草を植えたり、池の上流部分に田んぼを造ったり、池の周りに木を植えたりしました。そのような改造を行っていくと次第に池の水が澄んで透明になり、トンボやカエルなど多くの生き物が住みつくようになりました。

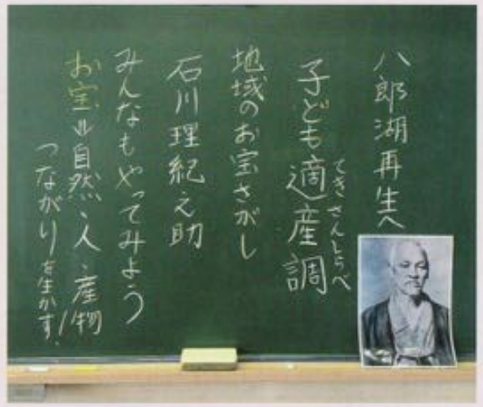
この実験結果をもとに、子ども達は八郎湖に秋田県が造成した浅瀬に行って、在来の水草を植える活動をしました。

5　水源地から八郎湖再生を考える

次に、八郎湖の上流（水源地）から湖の再生への道筋を考えました。学校のビオトープ池の水が澄み生き物が戻って来たように、将来八郎湖の環境が改善されたら生き物は何処から帰って来るのでしょうか。一度いなくなった湖の生き物たちは戻って来ることができるのでしょうか。

そのヒントは、子ども達が米作りの体験に訪れていた湖の水源地の谷津田にありました。この小学校では、田んぼ体験を毎年郷土の偉人石川理紀之助ゆかりの谷津田で行っています。この谷津田は周りを深い森に囲まれ清らかな水が湧いています。また、近くには湧き水を溜めた池（堤）もあり、かつて八郎湖に生育していたモクなどの水草が繁り、多くの生き物が生息しています。環境が悪化した八郎湖を追われた生き物たちや消滅したモクなどが湖の上流である水源地に残されていることを、子ども達は知りました。これらの生き物たちが、ドラゴンロードを通して湖に戻って来るという筋書きが、子ども達の中に浮かんできました。

6　つながりを生むために地域資源を掘り起こす～先人の志を継ぐ



八郎湖再生の物語を作る学習を進めていく中で、子ども達は上記の谷津田のように地域に眠っている資源を掘り起こし、自分たちの物語の中で新しい意味や価値を見出していくことが重要であることに気付きました。実は、そのような地域資源の掘り起こしをした偉大な先人が先に紹介した石川理紀之助であったことを知りました。理紀之助翁は、八郎湖の近く山田村出身の老農（農業指導者）で、生涯を貧農救済に捧げた人物です。理紀之助翁が行った「適産調」は、それぞれの土地の土壌や生産物、人々の生活習慣に至るまで地域資源を徹底的に調べ上げ、地域の自立に役立てようとした調査書です。彼は、これを元に農村の経営計画を立てました。膨大な資料収集は次代を担う人材の育成に役立てるという目的もありました。

この学習を通して、子ども達は自分達が行ってきた学習が、理気之助翁の適産調の精神を受け継いでいることに気づき、自分達こそがその継承者であり、また地域の未来の担い手であるという自覚を持つことになりました。

7　物語の中で、物が人々に語りかけるようになる～お帰り八郎太郎ブランドの提案

子ども達は、この学習を通して地域にある様々な物が物語の中で新しい意味や価値を語り始めることを体験しました。それは、物語（コンテキスト）の中で、様々な物が付加価値を持つようになるという体験です。このように地域の産物に付加価値を生み出していくことは、地域の内発的発展や活性化にもつながります。

子ども達は、八郎湖再生の物語の中から生まれて来た付加価値を持った物（地域ブランド）を増やしていくことが、湖の再生と一体化した地域活性化に結び付くことに気付きました。ここから「お帰り八郎太郎ブランド」の企画会議が始まりました。

企画会議では多数決を行わず、皆で自由に意見を出し合い議論を重ねました。みんなで物語を作る過程で、子ども達は他の人の考えに共感したり、自分の考えに無かった発想を得ることができました。多数決ではなく共感によってまとめていく。そのような体験を通して、子ども達はみんなの思いが込められた統一ブランドを完成させました。

8　物語の力を活かして社会に働きかける

四年生で完成したブランドデザイン（お帰り八郎太郎物語）を、五年生になってから地元の商店街や佃煮組合などに採用してもらうように働きかける活動を行いました。子ども達の提案に共感した生産者や商店などが、八郎湖再生に結び付く環境に配慮した商品に子ども達のブランドマークを付けて販売を行うようになりました。

この学習を通して子ども達の表情はいつも生き生きしていました。地域に夢を持ち、地元で生きていく自信や誇りを持った子ども達が将来この地域の資源を活かした事業を次々と興し、問題解決に向けてポジティブに創造的な姿勢で取り組んでくれることを期待します。

学習展開事例３

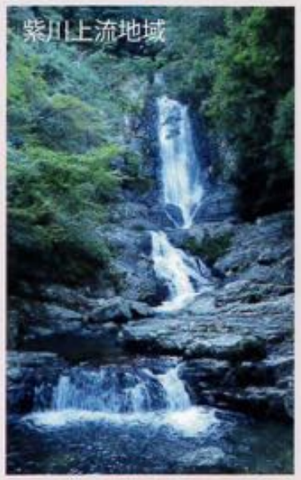
都市と農村を結び山川海のつながりを価値に変えるまちづくり
～　福岡県北九州市小倉南区　～

日本を代表する環境都市、北九州市は日本の近代化のさきがけとなった産業都市でもあり、公害や環境問題を早くから経験した地域で、同時に、今なお多様な自然環境が残されている地域でもあります。中でも小倉南区は近代的な都市と自然豊かな農村が隣接し、山川海のつながりをイメージすることができる地域です。ここでは、都市部が抱える問題と農村部が抱える問題を個別にではなく地域全体の大きなつながりの中で捉え直し、解決への道筋を考える学習を行っています。

小倉南区で取り組んでいる川を活かして農村（上流）と都市（下流）をつなげるまちづくり学習と流域社会を映し出す鏡としての干潟から取り組む未来のまちづくり学習の２つの事例を紹介します。

自然環境の特徴

北九州市小倉南区とその周辺では、山と川と海、ため池や水田に畑、干潟、市街地など多くの環境要素が混在しているという特徴があります。エリア内には水質汚濁を克服した紫川が流れ、カルスト地形で有名な平尾台やカブトガニが生息する曽根干潟があります。また絶滅危惧種の一つであるガシャモクという水草が残るため池など豊かで特色ある自然環境が今も残されています。



学習展開事例３－１　　川を活かして農村（上流）と都市（下流）をつなげるまちづくり
～～　涼のシンボル、ハグロトンボと一緒に考えるまちづくり　～～

ここでは、紫川の上流と下流に位置する学校の取り組みを紹介します。「紫川で見られる涼しい場所が好きなハグロトンボに、みんなの町の秘密を教えてもらおう。ハグロトンボの道を探してみよう。」そんな問いかけから紫川をテーマにした学習が始まりました。

長さ２２．４kmの紫川は、上流に農村部、下流に都市部を持ち、山と海を結ぶ北九州市を象徴する河川です。紫川は、かつての深刻な水質汚濁を乗り越え、環境再生が進められ多くの生物が戻ってきました。しかし、新たな問題として、下流の都市部ではヒートアイランド現象や生物多様性の低下などの問題があり、上流の農村部では過疎化や里山の荒廃といった問題が生じています。これらの問題を抱える地域をそれぞれどのように改善していくのか、子ども達が川のつながりを通して考えていきました。

１　川は生き物たちの通り道、つながりの大切さに気づく

「生きものとお話できるようになると今まで見えていなかったことが分かってくるよ。生きものとお話できるようになろう。」生き物の目になって地域を見直すと、様々なつながりが見えて来ます。学校やビオトープで見つけた生き物たちはどこからやって来たのだろうか、その謎を探っていくと、離れた住処と住処を結ぶ生き物の移動路（様々な通り道）があることに気付きます。中でも川は連続した環境として多くの生き物の通り道となり重要です。生き物の通り道としての川の存在に気づくことで、川によって自分たちの地域が他の地域とどのようにつながっているのか関心を持つようになります。

２　涼しさの指標ハグロトンボの道を通して地域を見直す

北九州市内では市街地でもハグロトンボの姿を見ることができます。ハグロトンボは日本の主要都市からは１９８０年頃には姿を消していますが、北九州市内では今でも所々で目にすることができます。ハグロトンボは、きれいな川で幼虫時代を過ごし、成虫になると成熟するまで川の近くの森林など涼しい所で過ごし、晩夏から秋にかけて川に戻って水草に産卵する生活をしています。

生物は種類によって、それぞれ移動に必要な条件が異なりますが、ハグロトンボは涼しい所を求めて移動します。子ども達はハグロトンボを調べることで、市内の所々に山があって川の多い北九州市の特色に気づくことができます。ハグロトンボの道を調べ、ハグロトンボの目になってまちを見直すことで、市内に広がる水の道や涼風の道が見えてきます。

３　川のつながりを通して、地域の価値や可能性を再発見する

市内を流れる紫川では、上流から下流までハグロトンボを見ることができますが、上流の農村部では普通に見られるのに対して、下流の都市部では稀にしか見られません。上流の小学校ではたくさんいるハグロトンボがどこまで移動できるのか、下流の小学校ではハグロトンボがどこから来たのか、どうしたら増やせるのかを、紫川のつながりを通して考えました。

学習を通して、上流の小学生には自分たちの地域が、下流の都市部に生き物や涼風、きれいな水を送るという機能を高めていく都市づくりの発想を、下流の小学生には紫川を通して上流部から都市部に送られてくる自然の恵みを都市空間に広げていく都市づくりの発想を、それぞれに促します。

４　つながりを理解することで、より広い視野で問題を捉え、解決に導く発想力を育む

このように川を通して、子ども達が自分たちの地域とは異なる地域とのつながりを意識した学習を行うことで、今まで以上に地元の特色を理解し、地元の特色を活かしたまちづくりの提案を考えることができるようになります。農村部と都市部が抱えている問題をそれぞれ別々に取り上げ解決方法を考える学習から、より広い視野で地域を超えたつながりを活かしつくることで、地域の潜在的な可能性を引き出し、解決方法を考え出す学習に転換することができます。このような地域の潜在的な可能性や価値を発掘していく発想を子ども達に促すことで、環境学習をさらに内容豊かに深く発展させ充実させていくことができます。

●　環境問題にポジティブに取り組む姿勢を育む

一般的に環境学習では、問題を解決するためにマイナス要素をいかに減らすか無くすかといった発想で取り組む例が多く、このような問題解決型の学習ではゴミ拾いやポスターなどによる環境改善活動や意識啓発活動などにパターン化（自己完結）しがちです。

この学習プログラムは、これまで述べてきたようにビオトープなどで身近にいる生き物がどこから来るのかという子ども達への問いかけから始まり、子ども達が地域に眠る環境のつながりに気づき、さらに大きなつながりとしての川の存在に気づくことで、地域の環境問題を見つめる新たな視点や広い視野を持つことを促していきます。

子ども達が地域に潜在するつながりを掘り起こし、地域のつながりから発想することにより、これまで思い付かなかった解決方法を提案することができるようになります。問題の解決に向けて、地域の中のつながりを活かしたり、新たなつながりを生み出すという発想で取り組んでいくことは、環境に取り組む子ども達の姿勢をマイナス思考からプラス思考へと大きく転換させます。

子ども達が環境問題に取り組む中で、地域に眠る価値の存在や価値創造の意味を知ることは、地域の持続的発展や真の活性化を実現する上で重要です。学習を通して子ども達の中に、地域の潜在的な可能性を引き出そうとする意欲や主体的に学ぼうとする意志、自分たちが未来の地域づくりの主役であるという自覚が芽生えていきます。

学習展開事例　3－2　　社会を映す鏡・干潟から取り組む未来のまちづくり

次は干潟をテーマに取り組む学習を紹介します。北九州市にはカブトガニやズクロカモメなどで知られる曽根干潟があります。干潟は全国的に減少している貴重な自然です。干潟は、環境の変化に敏感に反応する場所で、地域のあり方や地球環境を映し出す鏡と言われています。

曽根干潟には、北九州市内にある山や街や農地など様々な場所から川を通して様々なものが流れ込んできます。また、干潟は潮汐や潮流といった海の環境の影響を受けやすく、地球温暖化による海面上昇などの地球環境の変化も大きく影響する場所です。グローバルな視点で見ると、干潟はシベリアや北極圏とオーストラリアや東南アジアを大移動するシギなどの渡り鳥の重要な中継地にもなっています。このように干潟は流域の自然や社会のあり方を映し出すと共に、地球規模の環境の変化を映し出す鏡でもあります。

干潟をテーマとした学習では、身近な環境問題や日々の暮らしのあり方を考えることと、地球環境問題を考えることが直結しているのだと、干潟の生物や渡り鳥をとおして理解することができます。この曽根干潟が近隣にあり長年学習テーマとして取り組んできた小学校で実施したまちづくり学習について紹介します。

1　学校と干潟を結びつける生き物の道　生物の移動をとおして身近な空間を読み直す

干潟が近くにあっても、自分たちの学校や街と干潟とのつながりを意識することはなかなかできません。この学習プログラムでは、つながりを理解する目を子ども達の足元から広げていきました。学習はまず、学校や周辺で見られる身近な生き物の観察から始まりました。校庭に以前からあったビオトープ池の水が干上がり多くの生物が姿を消していたことから、ビオトープを作り直して生き物を呼び戻す活動を行いました。生き物と相談しながらビオトープ作りを考えるために、生き物のからだのつくりとすみか、くらしを学ぶ「生きものとお話しする方法」の授業を行い、この地域に昔からあった湿地を復元する形で、ビオトープをみんなで再造成しました。

ビオトープは、新しく作られた生息場所なので最初はほとんど生き物が見つかりませんが、しばらくすると次々と新しい生き物が発見されるようになります。それらの生き物たちは周囲から移動して来たものです。子ども達と、それらの生き物たちがどこからどのような所を通って学校のビオトープへ来たのかを調べました。それらの生き物の中には、曽根干潟周辺に見られる種類も含まれていました。このような生き物の移動を通して周囲の環境を見直すことで、子ども達は干潟やその周辺と学校周辺との結び付きを意識できるようになりました。

2　干潟の生き物から様々なつながりを学ぶ

子ども達は一年生の頃から何度も干潟に行って様々な体験学習を行っています。それらの体験を振り返りながら、干潟の生き物のからだのつくりやすみか、くらしの関係について調べ、それぞれの生き物が餌の取り方や餌のすみかに合わせた体のつくりをしていることや、干潟の中の僅かな凹凸や底質の違いなどを活かして暮らしていることなどを学んでいきました。

また、それらの多様な生物が生息できる多様な環境を生み出しているのは、流域から川を通して海へ流れ込み、干潟に集って来た土砂や森林などからの栄養分であることを学習しました。同時に、干潟に集まって来るのは、生き物に必要な土砂や栄養分だけではなくゴミや汚染物質などの人間の生活の中で発生するものも含まれていることに、干潟の清掃活動などを通して気づきました。

これらの気づきを通して、子ども達はこれまでは実感できなかったゴミや水質汚濁などの都市問題と干潟の生き物たちとのつながりを意識することができるようになりました。さらに、二酸化炭素の排出増加などによる気候変動の影響を受けやすいとされる地域（北極圏や熱帯）から干潟に渡来するシギなどの渡り鳥の減少などを通して、地球環境問題への取り組みと干潟の生き物の保護活動を結び付けて考えることができるようになりました。

身近な干潟の生きもの　トビハゼ

カブトガニ

3　干潟や生き物と自分たちの暮らし方や生き方を結び付けて考える

干潟を自分も含む様々なつながりの中に存在するものとして捉え直し、社会や地球の今を映し出す鏡として見つめることができるようになったことで、各学年で子ども達が学んできた様々な環境や社会をテーマにした学習が関連付けられていきます。子ども達は、干潟の生き物を見つめることで、ゴミ問題やリサイクル、地球温暖化、水汚染、森林減少などの多様なテーマを干潟を通して結び付け、自分の方法で総合化する力をつけていきます。総合化とは、このように子ども達がひとつの場を通して、自分の方法で多様なものを結び付けようと試み、その中にひとつの文脈（物語）を見出すことです。

干潟を深く掘り下げて見ることで、ひとつの対象から多様な分野へと広がる様々なつながりがあることに気づくことで、子ども達の中には環境問題をそれらのつながりを活かすことで解決させようという発想が生まれて来ます。

4　自分たちの取り組みを振り返り未来への思いを後輩たちに伝える

自然や環境をテーマとした学習に回答は用意されていません。これらのテーマは、どこまでも掘り下げていくことができ、どこまでも広げていくことができます。また、環境問題の解決には、長期の取り組みが必要です。そのため、子ども達が学習を実施している期間中に成果を上げ、目標を達成することは多くの場合困難です。

しかし、それは「継続は力なり」と体験や取り組みをただ繰り返し継続していけばいいということを意味していません。子ども達が一年間または数年間学習してきたテーマについての解決方法を自分たちで考え、ひとつの提案としていくことが重要です。それらは、たとえ仮説や検証途上であったとしても、それまでの自分たちの取り組みについて振り返り、残された課題や問題を明らかにし、それらを後輩たちにきちんと分かりやすく伝え、取り組みを継続させていこうという意識が、環境をテーマとした学習のみならず、社会の様々な問題と向き合っていく姿勢として大切です。

このような学習の場として、上の学年から下の学年への引き継ぎ会は、たいへん効果的です。この小学校では、毎年六年生が卒業を前にして、下の学年の生徒たちや地域の大人達に向けて、六年間の曽根干潟をテーマとした様々な学習を通して学んだことを振り返り、ひとつの物語として伝える環境フォーラムが開催されています。このような学習の場は、干潟は子ども達の成長した姿を映し出す鏡にもなっています。

アサザプロジェクトの環境学習では、総合的な学習の時間で目標としている『生きる力』を、子どもたちに身につけてもらうことを目標に、地域の環境問題という複雑で答えの用意されていない問いと向き合い、自ら解決方法を考え、実践していく学習に取り組んでいます。このような学習によって子どもたちのふるさとへの愛着や誇りを育み、地域の未来を担う主体としての自覚を促します。この学習プログラムの実践によって、地域の自然や文化を活かした持続可能な社会づくりの担い手を全国各地で育成しています。

みなさんも地域に眠る資源や可能性を再発見し、それを活かしたまちづくりに取り組んでみませんか？
アサザプロジェクトでは、これまでに紹介したようなプログラムを日本全国で、毎年1万名の子どもたちと進めています。

この学習プログラムをとおして、地域の課題に取り組んだ子ども達から生まれた「自分たちの町の未来はこうしていきたい！」という強い思いから、地域が実際に動き始めています。学校発の取り組み、PTAから始まる取り組み、子ども会から始まる取り組み、地域団体から始まる取り組み、伝統産業から始まる取り組みなど展開のパターンは実に様々です。

アサザプロジェクトの出前授業では、未来に向けたみなさんの思いを形にしていく支援をしています。
みなさんの思いをまずはお聞かせください。

問い合わせ先

認定特定非営利活動法人 アサザ基金

〒300-1222　茨城県牛久市南３－４－２１

電　話　：　０２９－８７１－７１６６
ＦＡＸ　：　０２９－８０１－６６７７
E- mail　：　asaza@jcom.home.ne.jp
ＷＥＢ　：　http://www.asaza.jp

この冊子は独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて作成しました。